

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590197

研究課題名(和文) 植民地朝鮮における天皇崇敬儀礼の教育史

研究課題名(英文) Educational History on Emperor Worship in Colonial Korea

研究代表者

樋浦 郷子 (HIURA, Satoko)

帝京大学・理工学部・講師

研究者番号：30631882

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、植民地朝鮮への「御真影下賜」について、時期と学校種を区分して詳細に調査、分析し、その背景について徴兵との関連から考察した。第二に、朝鮮における「不敬事件」について、日本内地との相違に注目しつつ明らかにした。第三に、「皇国臣民の誓詞」について、先行研究にはないアプローチ(とくに「声の1回性」)に着目して、それがもたらす教育実態の仮構性、危うさを明確化した。第四に、一般に完成せずに終わったとされてきた扶余神宮(忠清南道)について、1940年代の青年の動員を切り口として分析を試みた。いずれも「挑戦的萌芽研究」の目的にかなう成果と考える。

研究成果の概要(英文)：First, I investigated on "Imperial Portraits" given to Korean schools from the perspective of military draft of Korean youth. Second, I discussed Lese-Majesty cases against Japanese Imperial House in Korea, with focusing on the difference of those occurred in Japan mainland. Third, I examined "Oath of Japanese Imperial Subjects" by the new approach which had never seen in the precedent research. I made it clear that the reality and concoctions were seriously caused in Korean schools and Colonial rule. Finally, I tried to analyze on FuyoJingu Imperial Shrine which had been planned to construct in 1940s in Korea. Generally, it is said that the history of the FuyoJingu was finished with the unfinished state by Japanese surrender. But I shed new light on the construction process of the Jingu by observation of the sports pageants which had been hold in order to mobilize Korean people not only into the construction but into war. Each research accomplished the aim of this Grant.

研究分野：教育学

キーワード：教育史 近代日本史 朝鮮史 教育と宗教 学校儀式 植民地教育

### 1. 研究開始当初の背景

1890年代以降日本は本格的に植民地支配に乗り出し、1910年に朝鮮を併合する。しかし植民地朝鮮には「巡幸・行幸」も「御真影」もなかった。第三次朝鮮教育令(1938年4月)に至って、学校儀式で「御真影」に拝礼するという日本内地同様の文言が入ったものの、実態として朝鮮人初等学校に「御真影」はほぼ不在のまま解放を迎えた。すなわち、日本国内において巡幸や写真を通じ肉体を衆目にさらすことで「国民」の形成・統合の役割を担った天皇は、植民地朝鮮では長期に渡り不可視化が行われていた。これは、朝鮮支配と教育の構造を考える上で極めて重要な問題である。

日本による植民地支配を正当化し継続させるために、天皇は朝鮮では不可視化されねばならなかったとすれば、それはいかなる理由によるものだろうか。そうした特異な状況下で現地の朝鮮人児童を「日本国民」として教育する場合、いかなる手法がとられたのだろうか。朝鮮人児童は、不可視化により日本国内より高度に曖昧に「神秘化」された天皇像をどのように受け止めたのか。

こうした問題に迫るため、以下の課題を設定した。第一に、植民地朝鮮に固有の政策であり教育実践でもある「皇国臣民ノ誓詞」についての研究を深めること。第二に、「御真影」の不在一天皇の不可視化一という、日本国内と大きく異なる状況下で行われる天皇崇敬教育の実態を具体的に論じ、解明すること。第三に、可能な限り朝鮮人児童生徒の心情、受け止め方の多様なあり方について接近することである。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代日本の教育、とりわけ植民地期朝鮮における天皇崇敬教育と学校儀礼について「誓い」「表象」「身体」をキーワードとして据えつつ、多面的に分析することを目的とした。こうした分析視角を用いることによって、「皇民化運動」「同化教育」といった従来の研究枠組では捉えきれなかった問題群を掘り起こすことが可能になると考えられた。

神社、神棚、「御真影」などに関わる具体的な課題の検討を通じて、植民地下の教育のありさまを浮き彫りにするだけでなく、近代日本、帝国日本、朝鮮、旧植民地にとって、植民地支配/被支配とはいったい何を意味するのかということについて新しい観点から迫ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

「誓い」「表象」「身体」に、主に次のような計画と方法により接近することを計画した。「誓い」と「表象」に関わっては、韓国や台湾などに残存(放置)されている「誓い」のための遺物の実地調査と文献調査を実施した。例えば大邱広域市のヒョンプン初等学

校校庭に残されている「皇国臣民ノ誓詞碑」(写真1)や、台湾における鹽水国民小学校内神社(写真2)、新化国民小学泰安殿等の調査を実施した(2014年、2015年)。

国内においては、植民地権力を象徴する空間創成とシンボルに関わる研究を、教育史に限らずさまざまな関連領域を横断して積極的に幅広く学びとることを目指した。その結果、韓国の国家記録院などの諸データベースをもっとも活用することとなった。ほかに神社に関しては朝鮮で発行された『京城日報』『毎日新報』、「御真影下賜」に関しては『御写真録』(宮内庁所蔵)の読み込みを行った。

#### <写真1>

韓国慶尚北道ヒョンプン初等学校「皇国臣民ノ誓詞」碑石(2014年樋浦郷子撮影)。



#### <写真2>

台湾台南州鹽水国民小学校内神社(復元、2014年樋浦郷子撮影)。



### 4. 研究成果

#### (1)「誓い」に関わること

「皇国臣民の誓詞」(1937年10月)が制定された朝鮮の教育機関や朝鮮人社会ではどのような状況であり、どう反応されたのか、一定程度明らかになった(雑誌論文④⑤、学会発表②③)。誓わせること自体は目に見えない。「誓詞」の斉誦には「1回性」「その場性」を伴う。このことは「皇国臣民のちかい」

を「皇国臣民のちがい」に、「皇国臣民」を「亡国臣民」にといったように意図的に言い換えるなど、支配者にとってみれば一層捕捉の困難な自縄自縛の状況を引き起こしたことを立証した。

## (2) 「身体」に関わること

① 朝鮮の神社に任官した宮司の経歴を、日本内地の地方新聞を用いて調査する中で、思いがけず栃木県における関東大震災後の（朝鮮人に関するものを中心とする）「流言」が紙面を覆いつくしているのを発見した。県史類にこのことが触れられていないため、活字化して残すことを急務と考え、栃木県地方新聞三紙の1923年9月の見出し目録を作成した（雑誌論文②）。

作成の際、栃木県師範学校・商業学校・私立下野師範学校の男子生徒が「流言」の只中で、教員による「指導」のもと着剣の上徹夜で町の警戒に当たった史実を見出した。これは震災の歴史叙述における「自警団」像とは明らかに異なる。植民地支配を要因とする「身体」の取り込みは、植民地における被支配者に限られるものではないこと、そして日本人の動員としては一般的に言われる1940年代の勤労働員や軍事教練に時期的に限定されるものでもないことが判明した。

② 1940年代、朝鮮扶餘神宮創建工事が戦時下で進捗しない中、青年がどのように利用されたのか、スポーツページに注目して論じた（学会発表①）。この報告を通じ、従来言われてきた神社整地の奉仕だけでなく、まだそこに存在しない新たな神宮を可視化する道具立てとして、青年が大々的なスポーツイベントへと動員されたことに迫り、それは志願兵候補を強く意識したものであったことを指摘した。また、こうした動員から一見無縁のように見なされがちな女子対象教育機関については、新聞記事の分析を通じて男子対象機関よりも積極的に扶餘神宮奉仕作業に各地から出向いた様子も明らかになった。女子教育機関には現役将校の配属がないため、忠誠の可視化を行う必要があったのではないかと推測された。

## (3) 「表象」に関わること

① 朝鮮への「御真影下賜」の状況を、詳細に明らかにした（雑誌論文③④⑤）。

特に「下賜」により朝鮮の地域社会に引き起された朝鮮人と現地在住日本人との根本的な対立が連鎖する様相を明確化したうえ、「御真影奉置」がもたらす学校の不自然な（教室、宿舎、奉安殿などの）空間配置についても研究を行った。さらに、「御真影」窃盗など「不敬」事件についても新聞報道をもとにまとめ、日本内地との相違を考察した。その結果、同種の事件が日本内地で起きた時には、教職員対校長という対立関係がみられるわけだが、朝鮮においてはその上に、民族

対立構造が覆いかぶさっていることを示した。

また、なぜ南次郎朝鮮総督は1930年代後半に至って朝鮮人対象校への「下賜」に執着したのか、志願兵制・徴兵制との関連から検討した。南総督は就任以来、天皇の朝鮮訪問を熱望してその実施を働きかけていたものの、日中戦争の状況によってそれが不可能になったという背景を明らかにし、天皇の身体を朝鮮人に見せるという目的のために次善的に選んだ策が「御真影」の強制的な「下賜」ではなかったかと論じた（雑誌論文⑤）。

② 植民地における神棚、奉安殿の扱われ方について考察し、そこには絶え間なく生起し続ける「不敬」状態とそれへの警戒という文脈があったことを明らかにした（雑誌論文③④⑤）。また、その結果モノが時間の経過につれ不可視化、抽象化されたことを指摘し、日本の教育史研究において定説化している「教育勅語体制」の植民地における様相を「放置」という言葉を用いて説明した。（雑誌論文③）。

③ 神社に関しては、これまでの自身の研究において勉強が不足していた1940年代の神社創建と勤労働員、徴兵との関係や構造について、朝鮮扶餘神宮創建を研究課題として概要を一定程度明らかにした（学会発表①）。

ただし、次の諸点においてはさらに調査・考究しなくてはならない点が残し、引き続き課題番号16K04491において扶餘神宮造営の研究を継続することとした。

まず、青年の「修練」を名目とする勤労働員である。このことは朝鮮への徴兵制の導入とともに、日本内地における青年学校制度などとの比較の中から一層の検討を行う必要性が浮かび上がった。

また、宗教団体・宗教系私立学校や女子対象教育機関、朝鮮儒学関係者らによる勤労働員の実態、そして建築物を含む空間創成の実態について、フィールドワークを含めて、どこから、誰が動員されたのかという基本的史実をさらに明確に示さなくてはならないことが判明した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 山本 和行・樋浦 郷子・須永 哲思、インタビュー記録 戦中戦後台湾における教育経験：宜蘭・李英茂氏への聞き取り記録から、天理大学学報、査読有、第67巻2号、2016、pp.19-47、<https://opac.tenri-u.ac.jp/opac/repository/metadata/3812/GKH024103.pdf>

- ② 樋浦 郷子、栃木県における関東大震災「流言」関係新聞記事目録、帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編、査読無、第21号、2015、pp.157-174、  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020731825>
- ③ 樋浦 郷子、植民地期朝鮮の中等教育機関における天皇崇敬教育：「御真影」・奉安殿・誓詞、教育史フォーラム、査読有、第10号、2015、pp.21-41、  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020513914>
- ④ 樋浦 郷子、学校儀式に見る植民地の教育—現代日本の「国家神道」論争とのかかわりから—(韓国語)、翰林日本学、査読有、第25輯、2014、pp.59-71、  
[http://japan.hallym.ac.kr/index.php?mp=4\\_1](http://japan.hallym.ac.kr/index.php?mp=4_1)
- ⑤ 樋浦 郷子、植民地朝鮮の「御真影」：初等教育機関の場合、日本の教育史学、査読有、第57号、2014、pp.84-96、  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009844781>

[学会発表] (計3件)

- ① 樋浦 郷子、未完の朝鮮神宮が果たした役割と意味—大規模スポーツ行事への着目—、グローバルワークショップ History of Education and Language in Late Choson and Colonial Era Korea、平成28年2月20日、九州大学(福岡県・糸島市)
- ② 樋浦 郷子、植民地期朝鮮の天皇崇敬教育—中等教育機関を中心として—、教育史学会第58回大会、平成26年10月4日、日本大学文理学部(東京都・世田谷区)
- ③ 樋浦 郷子、学校儀式に見る植民地の教育—現代日本の「国家神道」論争とのかかわりから—、韓国翰林大学校日本学研究所国際学術シンポジウム、平成26年8月7日、春川市(韓国)

[図書] (計1件)

- ① 樋浦 郷子(イ・オンスク訳)、韓国高麗大学出版文化院、神社・学校・植民地 支配のための宗教—教育、2016、389(韓国語)

[その他]

ホームページ等

- ① <http://hiurasatoko.jimdo.com/>

(1)研究代表者

樋浦 郷子 (HIURA, Satoko)  
帝京大学・理工学部・講師  
研究者番号：30631882